

2018 年 5 月 30 日に上陸が確認されたヒグマについて

道総研環境科学研究センター 自然環境部長 間野 勉

島内における上陸個体の滞在状況について

2018 年 5 月 28 日時点で糞が確認されていたことから、それ以前に上陸したものである。足跡のサイズや自動撮影カメラの映像から、オスの成獣または亜成獣の個体と判断された。最初の確認から一週間で島内の西半分で、また三週間後にはほぼ全島で痕跡や自動撮影の記録が確認され、標高は海岸線から標高 600m まで及んだことから、上陸後短時間のうちに島内全域で活動したものと考えられる。

自動撮影記録から、7 月 6 日までは島内に滞在していたことが確認されているが、7 月 13 日以降新たな痕跡は確認されていない。高茎草本を食物資源として利用しなくなる晩夏以降、自家菜園やサケの遡上する河川など、利用する可能性のある場所での情報がなく、9 月下旬に実施した生息確認調査でも情報が得られなかった。6 月初旬の段階で、一定の期間、新たな痕跡等、ヒグマ滞在の証拠が得られなくなった場合には、管理方策の転換について協議することとしていたことから、10 月末開催の協議会において、警戒態勢を解除する方針が確認され、11 月 7 日に解除した。また利尻島への上陸の目的は、交尾期におけるメスの探索であり、メスの存在が確認できない時点で北海道本島へ戻った可能性が高いと判断された。島内に留まっている可能性を完全に否定するために、2019 年融雪期から 6 月までの期間に、再度監視を実施することとした。

2018 年に実施した監視活動において、活動中の画像の撮影や、多数の痕跡の発見によって、島内におけるヒグマの活動状況を把握することができたにもかかわらず、2018 年 7 月 13 日以降と 2019 年には、同様の手法による監視活動による新たなヒグマ生息情報が一切得られていない。これらの結果から、2018 年 7 月中旬以降、利尻島内で活動しているヒグマ個体は存在しないものと判断される。

行動から判断される上陸した個体の特徴について

侵入した個体は夜行性で、人間との遭遇を避けるように極めて慎重に行動していた。これらのことは、確認されたのは痕跡のみで一度も目撃されていないこと、自動撮影装置で確認された映像が全て夜間のものであったことから裏付けられる。ミトコンドリア遺伝子の分析から、上陸した個体は、豊富町由来の遺伝子型を持っていることが判明し、対岸から利尻に渡った可能性が高い。

管理活動について

ヒグマの生息しない離島における対応であったが、短期間に関係者による対策連絡協議会を立ち上げ、ヒグマの生息状況監視活動と、住民、観光客等への広報普及活動、さらにあつれき予防及び危機管理対応のための体制構築が進められたことにより、人身被害等のあつれきが起きることなく今回の終息に至ったと考えられる。特に、様々な機関、団体の連携で進められたヒグマの生息状況把握の取り組みによって、適切な管理対応を判断する上の重要な情報が提供されたことに敬意を表する。

今後の対応について

今後北海道本島からのヒグマの渡島^{ととう}が起きないという保証はないことから、今回の経験を活かした渡島^{ととう}、上陸を想定した対応方針を準備しておく必要があると考える。